

環境に挑む
歴史学

水島司

編 Mizushima Tsukasa

勉誠出版

が、近年の出版状況に反映されているが、本書の出版も、そうしたうねりの一翼を担うものである。このような形で出版に再度ご協力頂いた執筆者の方々、および出版と原稿のとりまとめに尽力された勉強出版編集部の高古麻己さんに深く感謝したい。

本書が、歴史研究の中に環境変動という視点をとり込んだ場合に、従来の歴史解釈はどのような広がりや深さをもつことができるのか、歴史学が環境を扱おうとする場合にどのような問題に直面するのかなどの問題を知り、環境をめぐる社会の関心に対して歴史研究がどのように応えていくかを歴史研究を志すものが考えるきっかけとなることをまず期待する。と同時に、本書をつうじて、環境研究の意義、重要性が共有され、歴史学研究が、環境というまだまだ余白の大きな分野で大きく発展し、新たな手法、新たな視点が生み出され、人類史への理解と人類が抱える問題へ立ち向かうための知恵が蓄積されていくきっかけとなれば、なお幸いである。

目次

序 環境に挑む歴史学

水島 司……………1

I 環境史へのアプローチ

人口と自然環境と比較史の文脈

斎藤 修……………3

地球環境問題の解釈とその解決

歴史学と自然科学の協働と融合

佐藤洋一郎……………17

環境史・災害史研究と考古学

宮瀧交二……………31

近年における歴史生態学の展開

世界最大の熱帯林アマゾンと人

池谷和信……………43

環境歴史学の可能性

飯沼賢司……………55

中国における環境史研究再考

鵜飼技術からみた自然と人間とのかかわり

卯田宗平……………68

II 地域史における環境

●日本

- 歴史のなかの環境とコモンズ 日本のおける資源利用
菅 豊……………83
- 棚田と水資源を活用した楠木正成
海老澤 衷……………94
- 環境史からみた中世の開始と終焉
高橋 学……………107
- 初期神仏習合と自然環境 〈神身離脱〉形式の中・日比較から
北條勝貴……………119
- 火山信仰と前方後円墳
保立道久……………154

●中国

- 歴史学と自然科学 始皇帝陵の自然環境の復元
鶴間和幸……………170
- 環境と人間の生活の通時的かわり 中国海南島の事例より
梅崎昌裕……………183
- 生態環境史の視点による地域史の再構築
上田 信……………195
- 生物多様性の歴史的变化研究のための史料について

雲南地域住民の天然資源保護・管理

- 十八世紀後半〜十九世紀前半の元江流域・メコン河上流域を事例として
クリスチャン・ダニエルス……………207

●南アジア・東南アジア

- 南アジアの〈環境―農耕〉系の歴史展開
応地利明……………219
- 南インドの環境と農村社会の長期変動
水島 司……………246
- 東南アジアにおける森林管理をめぐる環境史
田中耕司……………264

●西アジア・中央アジア・アフリカ

- 気候変動とオスマン朝 「小氷期」における気候の寒冷化を中心に
澤井一彰……………277
- ナイルをめぐる神話と歴史
加藤 博……………292
- 地中海、砂漠とナイルの水辺のはざままで 前身伝統に対峙した外来権力の試み
長谷川 奏……………308
- 遊牧民の移動と国際関係 中央ユーラシア環境史の一断面
野田 仁……………323
- 偽バナナは消えたのか 北部エチオピアの栽培植物をめぐる歴史学的考察
石川博樹……………336

●ヨーロッパ・アメリカ

- イギリス鉱物資源史と環境 コーンウォール半島鉱業地域の事例から
水井万里子……………348

史料解釈と環境意識の「発見」をめぐって
中・近世イタリア都市の場合

徳橋 曜……………361

ドイツにおける環境と歴史学・環境の歴史学
ヨアヒム・ラートカウ『自然と権力——環境の世界史——』を例に

森田直子……………374

自然環境と社会環境の連続性 ラテンアメリカにおける環境リアリティ

落合一泰……………383

執筆者略歴 399

I
環境史へのアプローチ

偽バナナは消えたのか 北部エチオピアの栽培植物をめぐる歴史学的考察

石川博樹

「偽バナナ」と呼ばれる栽培植物がある。本稿では、十八世紀後半から十九世紀前半にかけて北部エチオピアにおいてこの植物の栽培が急速に廃れたとする説を、残されている文字史料に基づいて検討する。そしてそこから得られた知見を基にして環境史研究の課題について考察し、さらにアフリカを対象とする環境史研究の可能性を考えたい。

はじめに

アフリカ大陸のなかで、サハラ砂漠より南に位置する地域をサハラ以南アフリカと呼ぶ。一般に「アフリカ」と呼ばれるこの地域では、ヨーロッパ人による植民地支配が始まる前まで多くの社会において文字が使用されていなかった。その中では例外的に、エチオピアの高原部では紀元前よりゲエズ文字（エチオピア文字）を用いて記録が残されてきた。一二七〇年に成立し、概ね現在の北部エチオピアの高原地帯を版図としたソロモン朝エチオ

ピア王国においても、数多くの文献が執筆された。しかしキリスト教徒が住人の大半を占めたこの王国において、文献の執筆を担ったのはキリスト教の聖職者であり、彼らが残した文献の大部分はキリスト教信仰に関連するものであった。中には君主の年代記のように、世俗の人物を対象とする文献も存在する。しかしそれとてキリスト教の神を賛美することを前提として執筆されていた。このようなエチオピア側史料には当然のことながら自然環境に関する記述は極めて乏しい。

エチオピア側史料から得られる情報が限られる中、重要な意味を持つのがイエズス会史料である。意外に思われるかもしれないが、エチオピア王国内では、日本とはほぼ同じ時期にイエズス会がキリスト教、正確にはローマ・カトリック信仰の布教を試みた。エチオピア王国の住民は、四五年のカルケドン公会議で異端とされた単性論派のキリスト教徒であったため、イエズス会士たちの布教活動は難航した。十七世紀に入って一時活況を呈したものの、結局イエズス会エチオピア布教は一六三〇年代前半に頓挫することになった。

布教のためにエチオピア王国を訪れたイエズス会士たちは多くの著作や書簡を残しており、それらはエチオピア王国史研究の重要史料となっている。それらの集成として最も重要なのが、イタリア人イエズス会士ベツカリが編纂した史料集である。イエズス会士たちが残した記録の中には、エチオピア王国内の自然環境や植生についての解説も含まれている。また農作物や耕作方法に関する彼らの記述は、当時のエチオピア王国の農耕について具体的に知ることができると同時に貴重である。イエズス会士たちはテフと呼ばれるエチオピア独特の穀類、小麦、大麦、モロコシといった穀類、各種の野菜、ヌグといわれる油料作物などが標高に応じて栽培されていたことを伝えている。

一、偽バナナとは？

さてイエズス会士たちが残した記録の中に、エンセーテと呼ばれる栽培植物についての記述が存在する。エンセーテ(学名 *Ensete ventricosum*)とはアフリカ・アジアの熱帯地域に分布するバショウ科バショウ属の植物であり、その外見がバナナによく似ているため「偽バナナ」とも呼ばれる(写真1、図1)。エンセーテはバナナのように食用の実をつけるわけではないものの、その根茎部や偽茎に多量にデンプンを蓄えるため、現在でもエチオピアの南西部の複数の民族がこの作物から得られるデンプンを主食としている(図2)。

イエズス会士たちがエチオピア高原を去ってからおよそ一四〇年後の一七七〇年代初頭に、スコットランド人探検家ブルースがエチオピア王国を訪れた。彼はナイルの水源を求めてタナ湖に流れ込む小アツバウイ川の流域を踏査した。そして彼はこの川の流域でエンセーテが栽培され、食用とされていたことを報告し、この植物について「ガツラ」によって青ナイル以南の地域から小アツバウイ川流域にもたらされたものであると説明している。「ガツラ」とは、十六世紀前半にエチオピアの南部から移動を開始し、その後エチオピアの中央部からケニアの北部にかけて広がる広大な領域に居住するようになったオロモと呼ばれる民族のことである。なお「ガツラ」は蔑称とされるので、以下、彼らの自称である「オロモ」という語を用いる。

イエズス会士とブルースのエンセーテに関する記述、特にオロモがエンセーテを北部エチオピアにもたらしたとするブルースの記述は、その後様々な議論を巻き起こした。

まず北部エチオピアにおいてかつて広くエンセーテが栽培されていたと考えるステイーラーは、オロモがエンセーテを北部エチオピアにもたらしたとするブルースの記述を否定し、彼が目にしたエンセーテはかつてこの地に広がっていたアガウという民族によるエンセーテ栽培の名残であると主張した⁽⁴⁾。一九五三年から一九五四年に



図1 ブルースの著作に見えるエンセーテの図
ブルースの著作『ナイル水源発見旅行』第5巻の動植物誌の中に含まれているエンセーテの図。

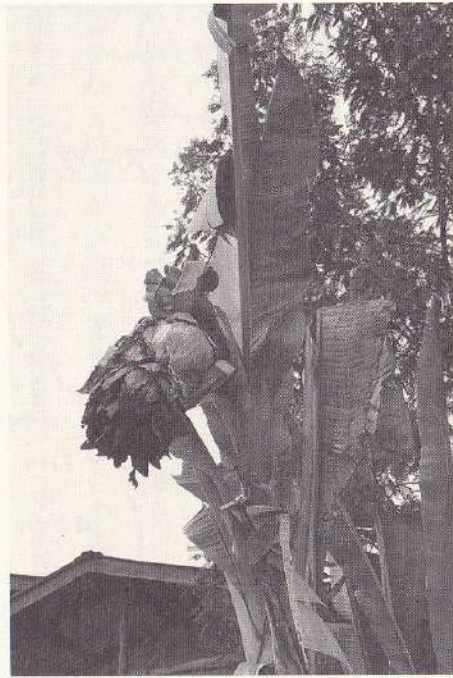


写真1 青ナイル源流近くのエンセーテ
小アツバウイ川を遡ると青ナイルの源流にたどりつく。これは源流近くのギーシュ・アツバイ村のエンセーテ。

かけて北部エチオピアにおいて調査を行ったサイモンズは、アガウがこの植物を広範に栽培していた証拠は見られないと述べ、ステイーラーの説に疑問を呈している⁽⁵⁾。サイモンズはオロモがエンセーテを北部にもたらしたとするブルースの記述を否定せず、また十八世紀後半、すなわちブルースがエチオピアに滞在した時代に、タナ湖の南に位置する地域においてアガウがエンセーテを主食としていたことは間違いないとも述べている。

その後ソロモン朝エチオピア王国史研究の第一人者であるパンカーストは、青ナイル以北にエンセーテをもたらしたのは、十六世紀のオロモの大移動の際に、彼らに追われて国内に移住した「ダモト人」であったと述べるとともに、オロモが北部エチオピアにエンセーテをもたらしたとするブルースの記述を否定した⁽⁶⁾。パンカーストがこの論考を発表してから、オロモとエンセーテの関係に関するブルースの記述の信



図2 現在のエンセーテ栽培地 下線を付した地名は国名、枠で囲まれた地名は主要都市名、網掛けをした部分が現在のエンセーテ栽培地。

など問題点が少なからず見受けられ、関連記録を精査したものは言い難い。ここではイエズス会士およびブルースが残した記録を再検討することにより、十八世紀から十九世紀にかけてゴッジヤムのエンセーテ栽培が急速に廃れたとするマツキャンとブラントの説を検証する。

二、関連記述の再検討

「この地に特有の作物」とは？

イエズス会士のエンセーテに関連する記述の中でまず検討しなければならないのは、一六二四年から一六三三年までエチオピア王国内で布教活動に従事したイエズス会士アルメイダの著作に見える「エンセーテはこの地に特有の樹木である」という一文である。この文の原文はポルトガル語で *Ensete he huma arvore propria desta terra* と書かれているが、マツキャンは「この地に特有の樹木」という部分を「この国（すなわち北部エチオピア）に特有の樹木 a tree peculiar to this country [i.e., northern Ethiopia]」と訳している⁹⁾。さらにブラントは、アルメイダの「ナレアの諸地方において、それは大部分の人々の食糧となっている」という記述を、ゴッジヤムにおいて当時エンセーテが主食であったかのように解釈している¹⁰⁾。

しかしマツキャンとブラントの解釈は、エンナルヤ（アルメイダの「ナレア」）という地域が当時置かれていた特殊な立場を考慮したものではなく、正確ではない。エンナルヤはギベ川流域にあり、十六世紀後半にオロモがこの地域に進出した（図2）。しかしこの時点でエンナルヤの先住民は完全にオロモに征服されず、その後も十七世紀半ばまで名目的にせよソロモン朝の君主に服属していた。アルメイダは、ソロモン朝君主ススネヨス（在位一六〇七〜一六三二年）の治世におけるエチオピア王国の版図と、オロモの移動が始まる前のかつての王国の版図について解説している¹¹⁾。それを見るとエンナルヤはススネヨス治世にも王国を構成する領域の一つに数えられているのに対して、ゴッジヤムとエンナルヤの間に位置した地域はススネヨス治世の王国の版図には含まれていない。すなわちススネヨス治世においてエンナルヤは王国の飛び地であったのである。アルメイダの記述は、エンセーテが「エンナルヤを含むエチオピア王国の領域」に特有の樹木であり、かつエンナルヤにおいて多くの人々の食

憑性を疑うことが一般化した。エチオピアの栽培植物について研究を行っている歴史学者マツキャンと考古学者ブラントは、パルカーストのこの論考に依拠しつつ、ブルースの記述と一八四〇年代に北部エチオピアを訪れた英国人探検家ビークの報告を比較して、一七七〇年代から一八四〇年代にかけてエンセーテの栽培がタナ湖と青ナイルに囲まれたゴッジヤムと呼ばれる地域において急速に廃れたと主張している⁸⁾。

しかしエンセーテに関する史料を用いたこれらの先行研究には、史料の誤読あるいは恣意的な解釈

糧源となつていと述べているにすぎず、これをもつてエンセーテが北部エチオピア固有の樹木であるとか、ゴッジャムにおいて人々の主食となつていたと主張することはできない。

北部エチオピアにおけるエンセーテ栽培地域

アルメイダがエンセーテに関する記述の中で具体的な地名として挙げているのはエンナルヤだけであるが、イエズス会士ロボは「ダモト人」のエンセーテ利用について実見し、その詳細を記録している。¹² ロボがエンセーテを目にした「ダモト人の地」はゴッジャムの一画であつた。¹³ 彼の記述によれば、ダモト人はエンセーテの葉を包装材料として用いるだけでなく、その繊維から工芸品をつくり、葉柄などからつくつた澱粉を食用とし、そして株分けによつて大量に増やしていた。

次にブルースの著作に見えるエンセーテ栽培地域について検討しよう。彼のエンセーテに関する記述は三種類に大別できる。まずブルースのエンセーテに関する最もまとまつた解説は、彼の著作の第五巻の動植物誌の中に見られる。この中で彼はエンセーテの原産地などについて解説している。¹⁴ 次にエチオピア王国内のエンセーテについて、彼は二種類の記述を残している。最初の記述はエチオピア王国の地域解説の中に見える。それによれば小アツバウイ川下流域のマイチャは水はけが悪い土地であるために穀類をほとんど産せず、人々はエンセーテを主食としていたという。¹⁵ 二番目の記述は、ブルースが「ナイルの水源」を求めて小アツバウイ川を遡行した際の記録である。その中で彼は小アツバウイ川中・上流域の一部の地域でエンセーテが栽培されており、それが食用とされ、またその葉で工芸品がつけられていたことを報告している。そして冒頭で述べたように、この植物をオロモがこの地にもたらしたとも解説している。¹⁶ すなわちブルースの記述からは、北部エチオピアにおいて小アツバウイ川の流域でエンセーテが栽培され、食用とされていたことがうかがえる。

このようにイエズス会士とブルースの記述に、エンセーテが栽培され、食用とされていたことを確認できる北部エチオピアの地域は、ダモト人居住地および小アツバウイ川流域であつた。紙幅の都合で詳細は割愛せざるを得ないが、イエズス会士およびブルースの記述を見る限り、当時ゴッジャムでは基本的に穀類栽培を主体とする農耕が行われていたと考えられる。ステイラーがエンセーテ栽培民であると考えたアガウも同様であつた。すなわち十七世紀から十八世紀にかけて、エンセーテ栽培はゴッジャムのごく一部の地域で行われていたにすぎない。

三、考察

冒頭で述べたように、マツキャンとブラントは一七七〇年代から一八四〇年代までの間に、北部エチオピアのゴッジャムにおいてエンセーテ栽培が急速に廃れたと述べている。ブラントはその要因については不明であると述べてつ、十八世紀末から十九世紀半ばまで続いた政情不安の中で、農民たちにとって収穫までに時間のかかるエンセーテの栽培が困難になり、穀類の栽培が好まれるようになったのではないかと推測している。¹⁷ このようなマツキャンとブラントの主張は十八世紀までゴッジャムにおいてエンセーテが広く栽培されていたという前提のもとになされている。しかし前述のごとくエンセーテ栽培はこの地域のごく一部で行われていたにすぎない。したがってマツキャンとブラントの説はそもそも成り立たないということになる。

それでは北部エチオピアでイエズス会士たちとブルースが目にしたエンセーテ栽培とはいかなる背景を持つものであつたのであろうか。この問いに答えるためには、ダモト人がいかなる集団であつたのかを明らかにし、ま

た現在のところ根拠のない憶測であるとみなされている「オロモがエンセーテを北部エチオピアにもたらした」というブルースの記述の信憑性について検討する必要がある。⁽¹⁸⁾ それとともに小アツバウイ川流域に現在でも生育しているエンセーテについて他地域のエンセーテとの植物学的な比較を広範に実施すること、十八世紀以前の小アツバウイ川流域の環境を解明し、それと現在エンセーテが栽培されている地域の環境を比較することも必要となる。

おわりに

さてここまでエチオピアのごく狭い領域で栽培されていた一つの植物をめぐる学説の検証を行ってきた。そこから浮き彫りになるのは、過去の自然環境に関して文字史料に基づいて研究することの危うさ、そして困難さである。

自然環境に関わる歴史学的研究は、通常の歴史学研究に比べて長い期間を対象とし、また広大な領域を対象とする。それゆえに研究者は個々の時代・地域の研究を専門とする他者の見解に依存せざるを得ない。しかしそれゆえに歴史的な背景を十分に把握していない研究者によって関連記述が恣意的に解釈され、誤った結論が導き出されることもしばしば起こり得る。今回のエンセーテをめぐる議論においては、オロモの移動によって生じたエチオピア王国内の混乱状況を念頭に置いていないがゆえにいくつかの重要な記述が誤って解釈された。

史料言語をめぐる問題も深刻である。北部エチオピアのエンセーテをめぐる議論においては、ポルトガル語で書かれたイエズス会士の記録について、それらが重要史料であるにもかかわらず研究者の多くが英語抄訳版⁽¹⁹⁾に依存し、原文に基づいて史料を検討するという歴史学研究の根本をおろそかにしてきた。彼らが犯した誤解や恣意

的な解釈の中に、この問題に起因するものは少なくない。アフリカ史研究においては往々にして複数の言語で書かれた史料を用いて研究する必要がある。その中で環境史を研究する際、史料への適切な対応は避けて通れない問題であると言えよう。

環境史研究においては、異なる学問領域の研究成果の安易な援用がしばしば批判されてきた。しかし振り返ってみれば、個々の学問領域においても他の研究者の研究成果が正確に扱われてきたと言えるであろうか。特に歴史学研究の場合、多種多様な史料から導きだされた研究成果を適切に総合して結論を導き出すことは、極めて困難なことと思われる。

しかしこのような困難を抱えながらも、環境史研究がアフリカ史研究において重要な課題であることは論を待たない。例えばエチオピア史について言えば、ソロモン朝エチオピア王国の版図を半分程度に縮小させるとも、現在のエチオピアの民族分布の形成に大きな影響を与えたオロモの大移動について、それを引き起こした誘因は未だ明らかにされていない。この大移動がオロモ社会内部の変化に起因するものであったのか、それとも気候変動による彼らの原住地周辺の自然環境の変化に起因するものであったのかが明らかになれば、我々のエチオピア史理解は大きく前進することになるであろう。

さて最後にアフリカ史研究そのものについて一言述べておきたい。アフリカの歴史を語る際、我が国においてはしばしば文字史料の乏しさ、時にはその欠如を前提として議論がなされてきた。歴史叙述と文字の関係について洞察することが歴史学研究上重要であることは論を俟たないが、植民地支配の開始、そしてアフリカ諸国の独立からすでに長い年月が経過した現在、この地域の歴史を研究するために用いることの出来る史料が蓄積されている事実を直視すべきであろう。アフリカの環境問題が世間の注目を集めて久しい現在、他の学問分野における研究の蓄積が厚く、学際的な研究を進めやすい環境にあるというアフリカ研究の利点を最大限に活かしつつ、利

用し得る史料を駆使してアフリカの環境に関わる歴史学的な研究を進めることは、歴史学界に求められている喫緊の課題の一つではなからうか。

注

- (1) このようなソロモン朝エチオピア王国における歴史叙述の特質については、拙著（石川博樹）『ソロモン朝エチオピア王国の興亡——オロモ進出後の王国史の再検討——』山川出版社、二〇〇九年）の序第四節を参照。
- (2) Beccari, C. ed., *Rerum aethiopicarum scriptores occidentales inediti a saeculo XVI ad XIX*, 15 vols., Culture et civilisation, Bruxelles, 1969 (1st ed. Roma, 1903-1917).
- (3) 現在見られるエンセーテの利用方法については、重田の解説（重田真義「ヒト——植物関係の実相——エチオピア西南部オモ系農耕民アリのエンセーテ栽培と利用」『季刊人類学』第一九卷第一号、一九八八年、二〇三—二四二頁）を参照。
- (4) Stähler, W., Studien zur Landwirtschafts- und Siedlungsgeographie Äthiopiens, *Erkundung. Archiv für Wissenschaftliche Geographie*, vol. 2, 1948, pp.257-281.
- (5) Simoons, F. J., Some Questions on the Economic Prehistory of Ethiopia, *Journal of African History*, vol. 6, 1961, pp.1-13.
- (6) Pankhurst, R., Enset as Seen in Early Ethiopian Literature: History and Diffusion, Tsedeke Abate, Clifton Hiebsch, Steven A. Brandt, Seifu Gebremariam, eds., *Enset-based Sustainable Agriculture in Ethiopia*, Institute of Agricultural Research, Addis Abeba, 1996, pp.47-52.
- (7) Beke, C. T., Abyssinia: Being a Continuation of Routes in that Country, *Journal of the Royal Geographical Society*, vol. 14, 1844, pp.2-76.
- (8) McCann, J. C., *People of the Plow: An Agricultural History of Ethiopia, 1800-1990*, The University of Wisconsin Press, Madison, 1995, pp.53-55; Brandt, S. A., The Evolution of Ensete Farming, Fukui, K., Kurimoto, E., Shigeta, M., eds., *Ethiopia in Broader Perspective* (Papers of the XIIIth International Conference of Ethiopian Studies, Kyoto, 12-17 December 1997), 3vols., Shokado Book Sellers, Kyoto, 1997, vol. 3, pp.848-849.
- (9) 前掲注∞ McCann p.54.
- (10) 前掲注∞ Brandt, p.848.
- (11) 前掲注∞ Beccari, pp.7-16.
- (12) Lobo, J., *Itinerario e outros escritos inéditos*, M. Gonçalves da Costa, ed., *Livraria civilização*, Minho, 1971, pp.459-461.
- (13) パンカーストはロボがエンセーテを目撃した地域について「ダモト、すなわちギベ川の北に位置する地域」と記している（前掲注6 Pankhurst, p.47）。「ギベ川の北」とは青ナイル以南の地を指していると思われるが、これは正しくない。オロモの攻撃を受けると青ナイル以南に位置していた「ダモト」から住民の一部がゴッジャムに移住した。ロボが訪れたのはゴッジャムのダモト人居住地であった。
- (14) Bruce, J., *Travels to Discover the Source of the Nile in the Years 1769, 1770, 1771, 1772, and 1773*, 5 vols., London, 1790, vol. 5, pp.36-41.
- (15) 前掲注∞ Bruce, pp.257-258.
- (16) 前掲注∞ Bruce, pp.584-585, p.589.
- (17) 前掲注∞ Brandt, pp.848-849.
- (18) 十六世紀から十八世紀にかけての各種史料に見える北部エチオピアにおけるエンセーテ栽培に関する記述については、拙稿（二六〜一八世紀のエチオピアにおけるエンセーテ栽培に関する史料訳注）『アジア・アフリカ言語文化研究』第八四号、二〇一二年、一六三—一八一頁）を参照。エンセーテに関するブルースの記述の信憑性については、拙稿（二七、一八世紀北部エチオピアにおけるエンセーテの食用栽培に関する再検討）『アフリカ研究』第八〇号、二〇一二年、一一—一四頁）において検討した。
- (19) Beckingham, C. F. & Huntingford, G. W. B., eds., *Some Records of Ethiopia 1593-1646: Being Extracts from the History of High Ethiopia or Abassia by Manoel de Almeida together with Bahney's History of the Galla*, The Hakluyt Society, London, 1954.

編者略歴

水島 司 (みずしま・つかさ)

1952年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科教授。インドの近世から現在までの社会経済史を専攻。グローバル・ヒストリー、歴史学へのGIS（地理情報システム）の導入についても研究を進めている。

著書・編著に、『現代南アジア6 世界システムとネットワーク』（東京大学出版会、2003年）、『前近代南インドの社会空間と社会構造』（東京大学出版会、2008年）、『グローバル・ヒストリーの挑戦』（山川出版社、2008年）、『地域研究のためのGIS』（古今書院、2009年）、『グローバル・ヒストリー入門』（山川出版社、2010年）などがある。

環境に挑む歴史学

2016年10月11日 初版発行

編者 水島 司

発行者 池嶋洋次

発行所 勉誠出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-10-2

TEL: (03)5215-9021(代) FAX: (03)5215-9025

〈出版詳細情報〉 <http://bensei.jp/>

印刷 太平印刷社

製本 若林製本工場

装丁 志岐デザイン事務所(萩原 睦)

組版 一企画

© Mizushima Tsukasa 2016, Printed in Japan

ISBN978-4-585-22149-4 C3020

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
乱丁・落丁本はお取り替えいたしますので、ご面倒ですが小社までお送りください。
送料は小社が負担いたします。
定価はカバーに表示してあります。

『ラテンアメリカン・エスノグラフィティ』（弘文堂、一九七八年）、『El Mundo Maya: Miradas Japonesas. Kazuyasu Ochiai, coordinador. Unidad Académica de Ciencias Sociales y Humanidades, UNAM, Mérida, 2006』、『トランス・アトランティック物語——旅するアステカ工芸品——』（山川出版社、二〇一四年）などがある。